広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　117－126

# 小学校歴史授業の改革（Ⅰ）

## ― 小単元「江戸時代と都市文化」の開発 ―

山田　秀和・片上　宗二

(2004年9月30日受理)

Reform of History Lessons in Elementary Schools (I):
A Teaching Plan for "Edo Period and Urban Culture"

Hidekazu Yamada and Soji Katakami

The aim of this study is to develop a teaching plan for history lesson in elementary schools. The purpose of this teaching plan is to make pupils understand theories of urban culture through studying the culture of the Edo period. The method for making this teaching plan is as follows; First, this plan starts with studying a historical character and expands to the study of the culture of the Edo period; Second, it progresses to comparing the culture of the Edo period with the present urban culture, so that pupils can extract general principles of urban culture.

Based on this method, we developed the lesson on "Edo Period and Urban Culture".

Key words : Social Studies, Teaching History, Learning Scientific Theory, Elementary School, Lesson Development
キーワード：社会科，歴史教育，理論学習，小学校，授業開発

## Ⅰ．はじめに―問題の所在―

現行学習指導要領に基づく小学校歴史授業は，人物や文化遺産の学習を中心にして過去の歴史や伝統を理解させる，という独自のスタイルをとっている。しかし現在の小学校歴史授業には，三つの問題点を指摘できる。

第一の問題は，子どもの視野を狭め，社会に目を向けさせにくくすることである。歴史上の人物を学習の中心にする理由は，彼ら彼女らが「国家・社会の発展に大きな働きをしてきたことや，それぞれの時代の人々の願いを実現するために様々な工夫や努力をしながら，優れた文化遺産を生み出したこと」[1)] を理解させ，「我が国の歴史や伝統を大切にし，国を愛する心情を育てる」[2)] ことにある，とされる。しかし，先人の工夫や努力，文化遺産創造についての学習は，子どもの目を，特定個人のレベルに埋没させてしまうおそれがあるのではないか。

第二の問題は，たとえ人物を起点にして社会に迫ろうとしても，授業は表面的な事実の理解にとどまってしまう，ということである。教科書に示される問いの多くは，「どのような時代だったのか」あるいは「どのように変化したのか」という事実をつきとめさせようとするものである。人物の行為や当時の出来事を調べ，時代や変化の実態をまとめるだけで授業は完結する（詳しくはⅢで具体例を挙げて例証する）。しかし，「何が起こったのか」という事実を知るだけでは，社会をわかったことにならない。「調べまとめる」という作業的な楽しさはあっても，事象の背後にある原因や要因を探らせない限り，子どもにとっては挑戦しがいのない授業になってしまうだろう。

以上の問題をクリアし，歴史上の社会における事象の原因や要因を探究させたとしても，もう一つの問題が残る。第三の問題は，ここでいう社会が，特定時代・特定地域の社会を意味していることである。歴史授業で学ぶ内容が，われわれの社会生活に，直接かかわりをもっていないのである。

これらの問題を解決するために，小学校歴史授業

は，どのように変革してゆけばよいのか。本稿では，問題解決の糸口となる一つの方策を示し，それに基づく小単元を開発したい。研究の手続きとしては，Ⅱで，問題解決の方向性を示すために，小学校歴史授業における理論学習について論じる。その上で，開発する小単元の構想（Ⅲ）と，実際の授業計画書（Ⅳ）を提示することにしよう。

## Ⅱ．改革の方向性
## ―小学校歴史授業における理論学習―

知識には様々なレベルが存在する。最も低次に位置付くのは，個別的な事象についての事実的知識である。それに対して，説明力の大きいのが，理論である。

社会に関する理論は，大きく二つある。一つは，総合的理論と呼ばれるものである。これは，特定の社会的事象の起因や結果，影響を説明するものであり，特定の事象に関する「なぜ」という問いに答えるための理論である。総合的理論は，歴史学など総合的性格の強い学問が，個々の事象を解釈し，体系化したものといえる。もう一つは，分析的理論である。これは，転移可能な知識であり，事象を分析し理解してゆくための枠組みとなる理論である。社会諸科学が，事象に見られる法則性を抽出し定立するのが，この種の知識である。総合的理論が，時間的空間的に限定された特定の事象についてのみ適用可能な知識であるのに対して，分析的理論は，転移性を持ち，様々な事象の生起や影響を説明・予測，あるいは制御することを可能にする知識である[3]。

小学校歴史授業を改革するために考えられるのは，一つのテーマの下で，この二つの理論を連続的に学習させる，という方法である。すなわち，1）人物から特定時代・特定地域の社会に有効な理論（＝総合的理論）を学ばせ，2）その理論を，たとえば現代社会の事例に照らして比較・検討させることで，より一般性のある理論（＝分析的理論）に成長させる，という方法である。

以上の方略に基づいて歴史授業を組織すれば，時間的空間的に限定された総合的理論を，ひとまず対象化させ，吟味させることが可能になる。そして，その理論のもとに描かれる時代像を，子ども自身の手で吟味させることができる。さらには，現代社会に適用可能な分析的理論を習得させ，現実の社会に目を向けさせることも可能になるだろう。

もちろん，以上のような方法とは逆に，抽象度の高い分析的理論の学習をメインにして授業を組織することも可能である。しかし，教育現場での実践可能性や，小学校という学校段階を考慮して，ここでは，人物から総合的理論へ，総合的理論から分析的理論へ，という学習の順序をとりたい。具体的な知識から抽象的な知識へと段階的に成長させることが，小学校歴史授業の改革として現実的であると考えられるからである。

## Ⅲ．小単元「江戸時代と都市文化」の構想

### 1．小単元の中核となる理論
### ―江戸文化論[4]，都市文化論―

本稿で開発を行う歴史授業は，小学校６年生の小単元「江戸時代と都市文化」である。現在一般的に行われている江戸時代の文化（以下，「江戸文化」と略す）の授業は，「調べまとめる」という方法を通して，変化の事実を子どもに知らせることを目的にしている。

具体例を示そう。教科書では江戸文化について，歌舞伎や浮世絵，国学や蘭学などが取り上げられている。一例として，歌舞伎を取り上げる授業を見てみると，そのねらいは，「歌舞伎について調べることから，文化の担い手が武士から町人に変化してきたことをとらえることができる」[5]となっている。授業は，「歌舞伎は，人々の間に，どのようにして広がっていったのでしょうか」という問いのもとで，「能と歌舞伎のビデオを見て感想や違いを話し合おう」から，「歌舞伎で演じられたものや支えてきた人について調べよう」，「調べたことを発表し江戸時代の文化についてまとめてみよう」へと展開する[6]。最後のまとめの段階で，子どもに身につけさせたい知識は，「武士から町人に文化の担い手が移ってきている」や「町人が歌舞伎を好んで見ているのは，日ごろのうっぷんを晴らしたい願望もあったのだろう」，「町人が娯楽を持てるほど裕福になっている」というものである[7]。

この授業は，歌舞伎やそれを支えた近松門左衛門，市川団十郎などを通して江戸時代の文化に迫ろうとするものである。しかし，授業で習得される知識は，子どもの興味を満たし，社会のしくみをわからせるものにはなっていない。

子どもが知りたいと思うのは，「町人が文化の担い手になった」や「町人が裕福になった」という表面的な事実ではないだろう。むしろ，そこから湧き出てくる「なぜ町人が文化の担い手になったのか」，あるいは「なぜ娯楽を持てるほど裕福になったのか」などの問いに対する答えではなかろうか。ここで示した授業は，事実的知識を調べ，まとめることで完結する。他

の江戸文化の授業についても同様である。そしてその結果，授業は，子どもの興味・関心を閉ざし，知識の成長を期待できないものになっている。

本稿で提示する授業は，事実的知識にはじまって，総合的理論，分析的理論へと子どもの認識を成長させる。同時にそれは，子どもの興味・関心を拡大させることにもつながると考えている。小単元のねらいは，江戸時代の文化の学習を通して，都市文化の一般的特質を解明し，現代社会の都市と文化の関係を読み解いてゆくための知識を習得させることである。

具体的には，総合的理論としての「江戸文化論（江戸時代の文化に関する理論。この小単元では特に江戸時代の都市文化の理論）」と，分析的理論としての「都市文化論」を学習させることを目的とする。「江戸文化論」は，「都市文化論」を，「日本」の「江戸時代」の都市文化に限定した理論である。「都市文化論」は，他の時代・地域にも適用可能な理論である。

開発する小単元では，江戸時代を，都市で庶民の文化が花開いた時代と捉える。そして，江戸時代に歌舞伎が流行した理由，江戸時代の都市で文化が栄えた理由を探らせる。

また，元禄文化や化政文化に代表される江戸文化は，都市文化の一つの事例である。小単元では，最終的に，都市文化一般の成立を説明できる知識まで子どもに習得させたい。具体的には，江戸時代と現在の都市文化の比較学習を通して，都市で文化（大衆文化）が栄える一般的な条件を子どもに探らせる。

この小単元は，現在とのかかわりで歴史を認識させることをねらいとするものである。また，現代社会を読み解くための知識を習得させようとするものである。本小単元は，「社会をわかる」ということに重点をおいた構成になっている。

## 2．小単元の展開―「江戸文化論」学習から「都市文化論」学習へ―

小単元「江戸時代と都市文化」は，教科書の構成や授業時数，子どもの発達段階などを考慮して，現実的な授業改革から革新的な授業改革まで対応できるように，幅を持たせて開発している。実際の小単元では，段階に応じて「展開」を区切っている。授業は「展開」のどの段階でも終了できるが，「展開」を進め，「発展」にまで至ることで，より大胆な授業改革が期待できる。

小単元の最初の段階（導入，展開１）では，近松門左衛門を通して歌舞伎流行の理由を探らせる。中心的な問いは，「なぜ役者は，歌舞伎を演じるだけで食べていけたのだろうか？」，「なぜ民衆は，歌舞伎を楽しむことができたのだろうか？」である。以上の問いを解明することによって，歌舞伎に関係する限りで，江戸文化の成立根拠を理解させることができる。

次の段階（展開２）は，歌舞伎流行の理由を経て，江戸時代の都市で文化が栄えた理由を探らせる。このパートは，江戸時代の都市文化の成立根拠を明らかにする過程である。「なぜ江戸や大坂で文化が栄えたのだろうか？」という問いを解明することが中心になる。ここでの学習は，江戸時代の都市文化に限定した総合的理論として，「江戸文化論」を体系化させることに重点をおいている。

より普遍的な知識の習得をめざすならば，さらに都市と文化に関する分析的理論の探求へと展開することができる。第三の段階（展開３）では，都市文化の中でも特に大衆文化に着目し，その成立要因を探らせる。具体的には，「江戸時代の江戸・大坂と，現在の東京・大阪，あるいは自分の身近な都市を比べてみると，都市と文化の関係にどのような共通点が見えてくるだろうか？」という問いを設定している。そして，映画，ファッションなどの流行と，江戸文化の流行の要因を比較させ，大衆文化が栄える条件を導かせる。ねらいは，現在にも適用可能な知識を習得させることである。この段階まで授業を行うことで，知識の成長を最も保障する歴史授業改革が成立する。

小単元の最後（発展）には，ここまでで習得した知識の有効性を試す過程を用意している。活動は，他の時代・他の地域の都市でも同じ条件で文化（大衆文化）が栄えているのかを調べることである。取り上げる事例は自由であるが，たとえば，平安時代の京都や，江戸時代とほぼ同時期のルイ14世時代のパリなどを扱うことができる。江戸文化を中心に，この小単元で探ってきたのは，民間主導型の商業主義に基づく都市文化である。それに対して，平安時代の京都やルイ14世時代のパリでは，行政主導型の都市文化が成立していた。例えば，ルイ14世時代のパリでは，王様がかつらをかぶったことを受けて，貴族やその他の市民がかつらをかぶるようになった。文化の拡がりは「上から下へ」であった[8]。

このような事実を提示することによって，これまでに習得した知識が都市文化の一つの理論にすぎないことを知らせ，他の理論を問い続けられるように促したい。授業はオープンエンドになっており，子どものさらなる探求心を触発するように計画している。

# Ⅳ．小単元「江戸時代と都市文化」の授業計画書

## 1．小単元の目標

江戸時代の文化の学習を通して，都市文化の一般的特質を解明し，現代社会の都市と文化の関係を読み解いてゆくための知識を習得する。(子どもに吟味させ，習得させたい知識内容は次の（1）～（3）の通り。)

(1)江戸時代に歌舞伎が流行した条件。

○役者は，農業の生産性が高く，分業が進み，様々なサービス業が生まれた都市において，歌舞伎で生計を立てることができた。

○民衆は，消費経済が発達した都市において，歌舞伎を楽しむことができた。

(2)江戸時代の都市（江戸や大坂）で文化が栄えた条件。

○江戸や大坂などの消費都市では，商業を基盤にして文化が形成された。

○江戸や大坂などの消費都市では，人々と商品が集まり，情報が交換されることによって，文化が生み出された。

(3)都市で文化（大衆文化）が栄える条件。

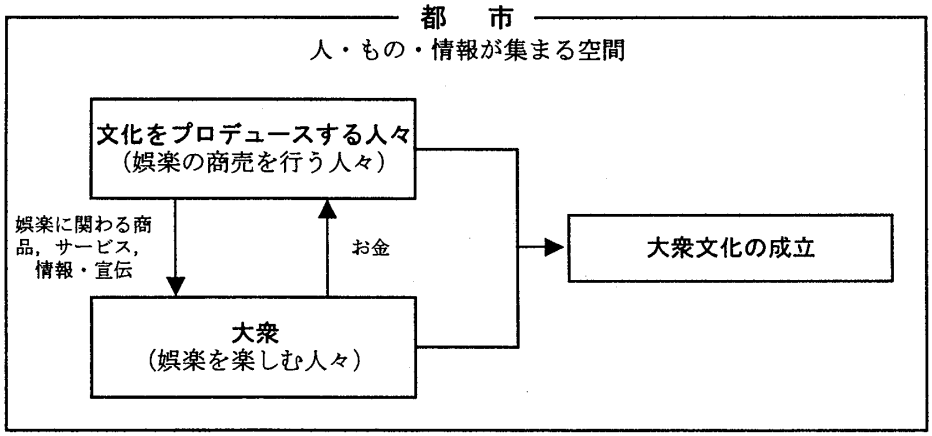
○大衆文化は，商業を基盤にして成立する傾向がある。

○大衆文化は，人・もの・情報が集まる都市において栄える傾向がある。

・大衆文化は，庶民がお金を払って娯楽を獲得することによって成立する傾向がある。

・大衆文化は，庶民にお金をつかわせるために，お店などが様々な娯楽を提供することによって成立する傾向がある。

・大衆文化は，文化のしかけ側が，様々な宣伝活動を行い，人々の意識に働きかけることによって流行する傾向がある。




**概念図：商業を基盤とした都市大衆文化の成立**

## 2．指導計画

(1) 導　入：近松門左衛門と歌舞伎

(2) 展開１：江戸時代の都市と歌舞伎

(3) 展開２：江戸時代の都市と文化

(4) 展開３：都市と文化

(5) 発　展：都市と文化を再び考える

## 3．小単元の全体構造

| パート | | | 主な発問・指示 | 時間 |
|---|---|---|---|---|
| 導入 | | 【人物を通した疑問の湧き出し】<br>・人物から派生する問いによって，興味を引き出す。 | ◎近松門左衛門の作品（歌舞伎）はなぜヒットしたのか？ | 0.5時間 |
| 展開 | 展開1 | 【総合的理論の探究①】<br>・江戸時代の都市と歌舞伎の関係を探る。 | ◎江戸時代に歌舞伎が流行した理由を探ろう。<br>○なぜ役者は，歌舞伎を演じるだけで食べていけたのだろうか？<br>○なぜ民衆は，歌舞伎を楽しむことができたのだろうか？ | 0.5時間 |
| | 展開2 | 【総合的理論の探究②】<br>・江戸時代の都市と文化の関係を探る。 | ◎江戸時代の都市で文化が栄えた理由を探ろう。<br>○なぜ江戸や大坂で文化が栄えたのだろうか？ | 1時間<br>（～2時間） |
| | 展開3 | 【分析的理論の探求】<br>・都市と文化の一般的な関係を探る。 | ◎都市で文化（大衆文化）が栄える条件を探ろう。<br>○江戸時代の江戸・大坂と，現在の東京・大阪，あるいは自分の身近な都市を比べてみると，都市と文化の関係にどのような共通点が見えてくるだろうか？ | 1時間 |
| 発展 | | 【総括と応用】<br>・都市と文化の関係をまとめ，それを他の事例に適用することによって，授業をオープンエンドなものにする。 | ◎他の時代・他の地域の都市でも同じ条件で文化（大衆文化）が栄えているのか調べてみよう。（たとえば平安時代の京都やルイ14世時代のパリなど。） | 1時間 |

## 4．授業モデル

| | 教師の指示・発問 | 教授・学習活動 | 資料 | 子どもから引き出したい知識 |
|---|---|---|---|---|
| 導入 | ○この肖像画は誰か？ | T：発問する<br>P：答える | 1 | ○近松門左衛門である。 |
| | ○近松門左衛門は何をした人か？ | T：発問する<br>P：答える | 2 | ○近松門左衛門は，歌舞伎や人形浄瑠璃の脚本を書いた。 |
| | ○近松門左衛門の作品には，どんなものがあるか？ | T：発問する<br>P：答える | 3 | ○『国性爺合戦』などの時代物や，『曽根崎心中』，『冥途の飛脚』，『心中天網島』などの世話物が存在する。 |
| | ◎近松門左衛門の作品はなぜヒットしたのか？ | T：発問する<br>P：答える | 4 | ◎近松門左衛門の作品の多くは，1）主人公が庶民であること，2）庶民社会のニュース種を作品の素材にしていたことによって庶民にうけ，ヒットした，といわれている。 |
| 展開1 | ◎庶民が中心だったら，なぜそれがヒットにつながったのか？江戸時代に歌舞伎が流行した理由を探ろう。 | T：発問する<br>P：考える | | |
| | ○そもそも，歌舞伎はどこから生まれたのか？なぜそれが広まったのか？ | T：説明する | | ○歌舞伎の起源は，出雲の女性お国が，かぶき者を演じて踊った阿国歌舞伎にある。この阿国歌舞伎は，あっという間に様々な都市に伝播していった。その過程で，歌舞伎踊には，三味線が加わったり，演劇にストーリー性が加わったりして発展していった。 |
| | ○絵を見て，この場所が何をあらわしているのか答えなさい。 | T：発問する<br>P：答える | 5 | ○歌舞伎が演じられている江戸の芝居小屋である。現代の劇場に相当する。 |
| | ○絵を見ると，歌舞伎を観に来ていたのはどんな人か？ | T：発問する<br>P：答える | 5 | ○庶民風の人々（男女）が多い。（中には，武士風の人もいた。） |
| | ○役者は歌舞伎を演じるだけで食べていけたのだろうか？それはなぜか？ | T：発問する<br>P：答える | 6 | ○歌舞伎の役者は，権力者のおかかえになるのではなく，都市の大衆を観客にすることによって生計を立てていた。それは，常設劇場ができていたことや，役者が都市に定住していたこと，興行制度をとっていたことからわかる。（ただし，下っ端の役者は，地方をまわったり，アルバイト（芸事の師匠など）をしたりして生計を立てていた。） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | ○なぜ民衆は，歌舞伎を楽しむことができたのか？歌舞伎の役者や歌舞伎の劇場は，民衆の人気を獲得し，民衆を楽しませるために，どのような工夫をしていたのだろうか？ | T：発問する<br>P：答える | 7 | ○歌舞伎の劇場やその周辺がたくさんのサービスを行っていた。たとえば，寿司，弁当，茶，菓子などが売られ，鍋物まで食べられるようになっていた。また，劇場は，顔見世番付を売り出したり，顔見世興行を行ったりして，宣伝やアピールを行っていた。 |
| | ○民衆は，なぜ歌舞伎を楽しみにしていたのか？ | T：発問する<br>P：答える | 8 | ○もちろん，芝居をみることも楽しみの一つであったが，それ以外にも，女性はオシャレをして自分を演出したり，ひいきの役者の浮世絵などを買ったりして楽しんでいた。 |
| | ◎庶民が中心だったら，なぜそれがヒットにつながったのか？ | T：発問する<br>P：答える<br>T：説明する | | ◎歌舞伎を行う側は，たくさんの庶民を観客として動員するために，都市に劇場をかまえ，庶民に様々なサービスを提供していた。また，庶民は，そのサービスを受けることで，歌舞伎を楽しむことができていた。役者は，農業の生産性が高く，分業が進み，様々なサービス業が生まれた都市において，歌舞伎で生計を立てることができたし，民衆は，消費経済が発達した都市において，歌舞伎を楽しむことができた。 |
| 展開2 | ◎江戸時代の都市で，（歌舞伎などの）文化が栄えたのはなぜか？江戸時代の都市で文化が栄えた理由を探ろう。なぜ江戸や大坂で文化が栄えたのだろうか？ | T：発問する<br>P：考える | | |
| | ○まずは江戸時代の大坂を見てみよう。大坂の人々は，文化を発展させるだけの生活力があったのか？それはなぜか？ | T：発問する<br>P：答える | 9 | ○シーボルトによると，一般的に，大坂での生活費は安くすんだという。なぜなら，大坂ではすべての商品と，すべての生活必需品が第一の産地から取り寄せられ，物価が安かったからである。 |
| | ○大坂の人々は，生活に潤いを持たせるために，何にお金をつかっていたのか？ | T：発問する<br>P：答える | 10 | ○蔵屋敷祭や寺社の祭礼・参詣・開帳，その他，行楽や芝居，見世物も楽しんでいた。 |
| | ○資料10の一覧表うち，たとえば，「讃岐屋敷金毘羅（さぬきやしきこんぴら）」という項目は，大坂の人々が何にお金をつかったことを示しているのか？ | T：発問する<br>P：答える | 11 | ○高松藩の金毘羅社には，現代のお金にして，年間1億2000万円の賽銭が集められていた。これは，大坂市中の高松藩の蔵屋敷に勧請された金毘羅社に，大坂の人々が賽銭を行っていたことを意味する。つまり，蔵屋敷は，お国自慢の霊験あらたかな寺社を公開して，大坂の市民をもてなし，それを大坂の人々は，居ながらにして参詣していた。 |
| | ○資料10に，祭礼・参詣・開帳という言葉が見られるが，これらは大坂の人々が何にお金をつかったことを示しているのか？ | T：発問する<br>P：答える | 12 | ○寺社も，賽銭を集めるために，様々な行事やお祭りを催し，大坂の人々をもてなした。大坂の人々も，開帳で仏像を見るなどすることができた。 |
| | ○資料10に，歌舞伎や見世物といった言葉が見られるが，これらは大坂の人々が何を求めてお金をつかったことを示しているのか？ | T：発問する<br>P：答える | 13 | ○大坂の道頓堀の芝居は，大坂最大の遊興場所で，大坂市民のみならず，大坂を訪れる観光客にとってもなくてはならない遊興施設だった。道頓堀には，大芝居・中芝居・小芝居と呼ばれる芝居小屋が軒を並べ，道頓堀の浜側には芝居観客のための茶屋が軒を連ねていた。また，周辺ではラクダやゾウの見世物などが開かれていた。この地域一帯で一大アミューズメントパークが形成されていた。 |
| | ○大坂は，どのような性格を持った都市だったのか？ | T：発問する<br>P：答える<br>（T：説明する） | | ○大坂は，人と商品と情報が集まる大都市だった。また，文化の中心であり，消費都市としての性格を持っていた。 |
| | ○大坂に娯楽がたくさん出現していたのはなぜか？ | T：発問する<br>P：答える | | ○大坂では，庶民に金銭的な余裕があり，その金銭をめあてにして，様々な施設が誕生し，娯楽が提供されるようになった。 |
| | ○江戸の場合を見てみよう。江戸の人々は，文化を発展させるだけの生活力があったのか？それはなぜか？ | T：発問する<br>P：答える | 14 | ○江戸は，火事が多く，消費経済が発達していたため，仕事はいくらでもあった。そのため，蓄えが無くても，その日暮らしができた。物価も安く，商人も薄利多売が普通だったので，それなりに遊ぶ余裕もあった。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | ○江戸の人々は，生活に潤いを持たせるために，何にお金をつかっていたのか？ | T：発問する<br>P：答える | 15 | ○大坂と同じく，歌舞伎や見世物，水茶屋，寺社への参詣，開帳などにお金をつかっていた。 |
| | ○歌舞伎を例にしよう。江戸では，歌舞伎がどれくらい流行していたのか？歌舞伎から庶民に流行したものは何か？ | T：発問する<br>P：答える | 16 | ○江戸の庶民の流行を先導したのは，歌舞伎の名優達であった。たとえば，名女形といわれた伊藤小太夫による「小太夫鹿の子」は，「京鹿の子」のような複雑なつくりではなく，現地調達可能な江戸紫を使用するなど，安価に供給することができ，江戸の庶民の間で大流行を生み出した。 |
| | ○なぜ江戸では庶民の側から文化の流行が巻き起こったのか？ | T：発問する<br>P：答える | 17 | ○江戸は「天下のふきだまり」であり，全国から集まってきた人々によって新しくつくられた都市社会だった。したがって，人々は，意識するとしないとに関わらず，他者とのつながりを強く求め，たとえば流行のファッションを身に付けることで，自分が社会の中の一員であることを確認するようになった。以上のような理由で，庶民から流行が生まれた。 |
| | ○本来は幕府の本拠地なのだから，権力を持っている人のほうから流行がおこるのが普通ではないだろうか。なぜそうではなかったのか？ | T：発問する<br>P：答える<br>T：説明する | 18 | ○鎖国していたから，幕府は国威を海外に示すために，芸術・文化で装いをこらすことも，貿易のため芸術的・文化的に優れた製品をつくりだす必要もなかった。（江戸城の天守閣が焼失しても再建していないところに，その気風が現れている。また，武士は禄高の中で家計をやりくりしなければならなかったので，質素を旨とし，芸術・文化の担い手にはなりにくかった。） |
| | ○江戸は，どのような性格を持った都市だったのか？ | T：発問する<br>P：答える<br>（T：説明する） | | ○江戸も大坂同様，人と商品と情報が集まる大都市だった。また，文化の中心であり，消費都市としての性格を持っていた。 |
| | ○江戸に娯楽がたくさん出現していたのはなぜか？ | T：発問する<br>P：答える | | ○江戸も大坂同様，庶民に金銭的な余裕があり，その金銭をめあてにして，様々な施設が誕生し，娯楽が提供されるようになった。 |
| | ◎江戸時代の都市で，歌舞伎などの文化が栄えたのはなぜか？また，江戸時代の文化は，それ以前の文化とどのような点で異なっていたのか？江戸と大坂の共通点から考えてみよう。 | T：発問する<br>P：答える<br>T：説明する | | ◎江戸時代の江戸や大坂などの消費都市では，商業を基盤にして文化が形成された。このような大衆中心の文化は大衆文化といわれる。すなわち，江戸時代の都市では，人々と商品が集まり，情報が交換されることによって，文化（大衆文化）が生み出された。また，江戸時代の都市では，人々が，希薄になった集団の共同体意識を求めたために，文化の流行が助長された。（なお，このような庶民の側からの文化形成は，それ以前にはあまり見られなかったものである。以前は，権力者が文化の中心であった。） |
| 展開3 | ◎本当に都市は，文化（大衆文化）の発信地なのだろうか？なぜ都市で文化（大衆文化）が栄えるのか？（江戸時代以外にもあてはまるような）都市で文化（大衆文化）が栄える条件を探ろう。 | T：発問する<br>P：考える | | （このパートでは都市文化の理論を，教師と子どもによる自由な発想と議論で構築させたい。以下で扱う事例以外のものを用いてもよい。） |
| | ○現在の都市には，どのような娯楽施設があるだろうか？ | T：発問する<br>P：答える | 19 | ○劇場・映画館，スポーツ施設（球場など），ファッションビル，博物館，美術館，水族館，テーマパーク，アミューズメントパーク，各国料理店など。 |
| | ○江戸時代の江戸・大坂と，現在の東京・大阪，あるいは自分の身近な都市を比べてみると，都市と大衆文化の関係にどのような共通点が見えてくるだろうか？たとえば，劇場・映画の流行についてはどうか？ | T：発問する<br>P：考えをまとめ，話し合う | 20 | ○江戸時代の劇場も，現在の劇場・映画館も，人・もの・情報が集積する都市に立地し，商業を基盤にして文化（大衆文化）の流行が生み出されている。その共通した条件は，たとえば次のようになる。<br>（例）<br>・観客は，お金を払って娯楽を獲得している。<br>・劇場は，お芝居や映画を見せるだけではなく，食べ物や飲み物，パンフレットなどを販売して，観客にサービスを提供している。<br>・劇場や映画のしかけ側は，様々なメディアをつかって，宣伝活動を行い，人々の意識に働きかけて流行を助長させようとしている。（たとえばUSJなどのアミューズメントパークは，映画の宣伝活動を行うことができると同時に，流行を生み出している。） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | ○たとえば，ファッションの流行についてはどうか？ | T：発問する<br>P：考えをまとめ，話し合う | 21 | ○ファッションの流行の条件は，たとえば次のようになる。<br>(例)<br>・お客は，お金を払って娯楽を獲得している。<br>・お店は，服を売るだけではなく，アドバイスをしたり，情報を提供したりして，お客にサービスを提供している。<br>・ファッションのしかけ側は，流行色を決め，ファッションショーを開き，雑誌で紹介するなど，様々な宣伝活動を行い，人々の意識に働きかけて流行を助長させようとしている。 |
| | ◎なぜ都市で文化（大衆文化）が栄えるのか？ | T：発問する<br>P：答える | | ◎大衆文化は，商業を基盤にして成立する傾向がある。したがって，大衆文化は，人・もの・情報が集まる都市において栄える傾向がある。その条件を挙げると，たとえば次のようになる。<br>(例)<br>・大衆文化は，庶民がお金を払って娯楽を獲得することによって成立する傾向がある。<br>・大衆文化は，庶民にお金をつかわせるために，お店などが様々な娯楽を提供することによって成立する傾向がある。<br>・大衆文化は，文化のしかけ側が，様々な宣伝活動を行い，人々の意識に働きかけることによって流行する傾向がある。 |
| 発展 | ◎他の時代・他の地域の都市でも同じ条件で文化（大衆文化）が栄えているのか調べてみよう。<br>・他の時代，たとえば平安時代の京都でも同じ条件で文化が栄えているのだろうか？<br>・他の地域，たとえばルイ14世時代のパリでも同じ条件で文化が栄えているのだろうか？<br>(以上は，「行政主導型の都市文化」の事例であり，本小単元で扱った「民間主導型の都市文化（＝大衆文化）」とは性格が異なるものである。また，これらは，学習した理論を相対化させ，有効性と限界性を確認させるための事例である。実際には，資料を提示して，教師が事例を紹介し，子どもに考えさせる。) | T：発問する<br>P：考える | 22 | (これまでに考察してきた大衆文化流行の条件を再度考察すると同時に，それを他事例に適用する。「民間主導型の都市文化（＝大衆文化）」と「行政主導型の都市文化」の違い，および，それぞれの性格まで考えさせたい。) |

**資料**（資料のタイトルは，筆者が付したり，出典から引用して改題したりしている。また，実際の資料は，出典をもとにして，小学生用に，文献の引用箇所を要約したり，内容をかみくだいたり，挿絵や写真をつけたりするなどの加工を施している。）

1「近松門左衛門の肖像画」（東京書籍『新しい社会６上』2002，p.68）
2「近松門左衛門の仕事」（東京書籍『新しい社会６上』2002，p.68）
3「近松門左衛門の作品」（図説や資料集などの作品一覧表。中学校用でもよい。）
4「近松作品が流行した理由」（田口章子『歌舞伎と人形浄瑠璃』吉川弘文館，2004，p.88）
5「歌舞伎のようす」（東京書籍『新しい社会６上』2002，p.68）
6「芝居小屋と興行制度」（梅棹忠夫・守屋毅編『都市化の文明学』中央公論社，1985，pp.60-61）
7「芝居小屋のしかけ」（田口章子『江戸人と歌舞伎－なぜ人々は夢中になったのか－』青春出版社，2002，p.44，pp.63-67）
8「歌舞伎の楽しみ」（田口章子『江戸人と歌舞伎－なぜ人々は夢中になったのか－』青春出版社，2002，p.54，pp.63-67）
9「シーボルトが見た大坂」（サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ－文化装置を考える

－』日本放送出版協会，1996，pp.33-34）
10「大坂で人々は何にどれくらいお金をつかったのか？（一覧表）－浪華大紋日上高金銭山（なにわおおもんびあがりだかこがねのやま）－」（サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ－文化装置を考える－』日本放送出版協会，1996，pp.38-39）
11「蔵屋敷のしかけ－讃岐屋敷金毘羅（さぬきやしきこんぴら）－」（サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ－文化装置を考える－』日本放送出版協会，1996，p.42）
12「寺社のしかけ－祭礼・参詣・開帳－」（サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ－文化装置を考える－』日本放送出版協会，1996，pp.42-47）
13「芝居とラクダの見世物」（サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ－文化装置を考える－』日本放送出版協会，1996，pp.52-55）
「ゾウの見世物」（川添裕『江戸の見世物』岩波新書，2000，p.96）
14「『宵越しの金はもたねぇ』のなぞ」（田口章子『江戸人と歌舞伎－なぜ人々は夢中になったのか－』青春出版社，2002，pp.24-25）
15「江戸っ子の遊び」（田口章子『江戸人と歌舞伎－なぜ人々は夢中になったのか－』青春出版社，2002，pp.25-26）
16「『小太夫鹿の子』の流行」（川添登『都市空間の文化』岩波書店，1985，p.63）
17「他人とのつながりを求めて流行を生み出す都市民」（川添登『都市空間の文化』岩波書店，1985，p.65）
18「幕府や武士が文化の担い手にならなかった理由」（川添登『都市空間の文化』岩波書店，1985，p.62）
19「都市の娯楽施設」（東京，大阪，身近な都市のタウン情報誌や観光ガイド）
20「映画業界のしくみ」（浜野保樹『表現のビジネス－コンテント制作論－』東京大学出版会，2003，pp.115-119，その他，映画のポスターや広告などが利用可能である。）
21「ファッション業界のしくみ」（「流行色」と商品化については，日本流行色協会のホームページ【http://www.jafca.org】を参照。その他，広告やファッション誌，タウン情報誌などが利用可能である。）
22「平安時代の文化－文字と文学の流行－」（教科書など。たとえば，東京書籍『新しい社会６上』2002，pp.26-27）
「ルイ14世時代の文化－かつらの流行－」（川添登『都市空間の文化』岩波書店，1985，pp.63-64）

## Ⅴ．おわりに

本稿で示した小単元「江戸時代と都市文化」は，人物と歌舞伎にはじまり，人物・歌舞伎から江戸文化へ，江戸文化から都市文化一般へと，子どもの視野を拡大させると同時に，認識を成長させるように計画している。そして，現実的な授業改革から革新的な授業改革まで対応できるように，授業に段階性を設けている。

今後は，教育現場にて実験的に授業を試み，開発した小単元の有効性を吟味・検証してゆきたい。

## 【注】

1）文部省『小学校学習指導要領解説　社会編』日本文教出版，1999，p.83。

2）文部省『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局，1998，p.27。

3）分析的理論と総合的理論については，森分孝治「開かれた科学的認識形成の授業構成（二）－子どもと社会科学－」『教育科学社会科教育』No.238，明治図書，1983，pp.105-113に学んだ。なお，わが国の歴史授業は，通常，総合的理論の学習を行っているが，国外では，分析的理論の学習を行うための教材も開発されている。筆者（山田）は，分析的理論の学習を意図した歴史教育を「社会科学科歴史」として性格規定している。詳しくは，山田秀和「社会システム論を基盤とする世界史課程編成－B. G. マシャラス『探求による世界史』を手がかりとして－」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第46巻第二部，2001，同「市民性教育のための社会科学科歴史－ホルト・データバンク・システム『アメリカ史』の再評価－」全国社会科教育学会『社会科研究』第54号，2001，同「社会科学科歴史の教材構成原理－「類型的理論」探求学習の場合－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第15号，2003を参照されたい。また，筆者（山田・片上）は，分析的理論を探求させる世界史授業の開発も行っている。山田秀和・片上宗二「世界近現代史の授業改革－単元「宗教から読み解く世界：原理主義と近現代」の開発－」広島大学大学院教育学研究科

附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』第10巻，2004。

4）ここでいう「江戸文化論」とは，江戸時代の文化（特に江戸時代の都市文化）に関する理論のことを意味する。小学校歴史授業では，元禄文化や化政文化を特に区別していないので，それらを含めて，本稿では江戸文化という言い方を用いることにした。

5）東京書籍『新しい社会６上　教師用指導書　研究編』2002，p.172。

6）同上。

7）同上。

8）民間主導型の都市文化と行政主導型の都市文化，およびそれらの事例については，川添登『都市空間の文化』岩波書店，1985に学んだ。

※本稿では，総合的理論については「探究」を使用し，分析的理論については「探求」を使用している。「探究」は特定の事象についての解釈をより精緻なものに「究」める活動であると考え，「探求」は様々な事象を説明できる，より一般的な法則を「求」める活動であると考えている。

## 【主要参考文献】

1）片上宗二『社会科授業の改革と展望－「中間項の理論」を提唱する－』明治図書，1985。

2）片上宗二『オープンエンド化による社会科授業の創造』明治図書，1995。

3）森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書，1978。

4）森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書，1984。

（主任指導教官：片上宗二）